

Come と Go に関する一考察

－ 「come+complement」 と 「go+complement」 を中心に －

友 繁 義 典
人間環境部門

A Consideration of the Motion Verbs *Come* and *Go*

Yoshinori TOMOSHIGE

School of Human Science and Environment, University of Hyogo
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

The motion verbs *come* and *go* are sometimes used to refer to change of state rather than to motion. Clark (1974) has claimed that in the form of *come*+complement, *come* is used to denote entry into a normal state, whereas in the form of *go*+complement, *go* is used to denote departure from a normal state. The forms *come*+complement and *go*+complement are used to indicate the speaker's evaluation of a state of affairs. It is generally true that *come* is used to refer to a speaker-approved or public-approved state, while *go* refers to either a neutral or a negative state, but there are also exceptions to these generalities. In this paper, I explore other explanations of the differences between the two forms in order to cover the common cases and the exceptions in terms of semantics and pragmatics.

Key words: the speaker's evaluation of a state of affairs, complements, semantics, pragmatics

1. はじめに

小論では、状態変化を表す「come+complement」と「go+complement」を中心にしながら、come と go に関して考察することにする。complement に相当する語は、形容詞、過去分詞あるいは名詞であるが、本論では、特に、「come+形容詞」と「go+形容詞」に重点を置いて両者の違いについて考察を行う。

Clark (1974:317) は、come は、人物や出来事をプラス評価するのに用いられ、「好ましい」状態への変化を含意し、その一方 go は、「中立的」あるいは「否定的」状態への変化を含意すると仮定している。また、come あるいは go が用いられる基準点は、平常あるいは正常と考えられる状態が直示的中心 (the deictic center) をなすという。つまり、ある状態が良い状態あるいは悪い状態へ変化したと判断する基準が直示的中心で意味論的且つ語用論的判断を伴う。このような仮定は、Clark 仮説と呼ばれている。第2節で、この Clark 仮説に関する諸

家の見解を見ると同時に Clark 仮説では説明がつかない例が存在することを見ていく。第3節では、第2節で見るように come が好ましくない状態への変化を、また go が良いと思われる状態への変化を表すのに用いられる場合があることを見る。第4節では、「come+形容詞」型と「go+形容詞」型について検討し、第5節で come と go の使われ方の違いを確認する。

2. Clark 仮説に対する諸家の見解

Clark 仮説では、come は、normal state (正常な状態) へ入ることを、一方、go は、non-normal state (正常でない状態) あるいは、neutral state (中立的な状態) へ入ることを表すとされている。Clark (1974:319) があげている次の例を見ることにしよう。

- (1) a. John went into a coma yesterday.
b. *John came into a coma yesterday.

- c. John came out of the coma yesterday.
- d. *John went out of the coma yesterday.

現実の世界における我々の認識として、「正常な状態」は、「意識のある状態」であり、「正常でない状態」は、「昏睡状態」である。すると、上の各例は、Clark 仮説を支持していると言える。また、次の例 (2a) と (2b) に関しても、モーターというものは動いている状態、すなわち機能している状態が正常な状態であり、機能していない状態は正常ではない状態であると言えるので、Clark 仮説が正しく come と go の違いを予測すると言える (Clark 1974:320)。¹

- (2) a. The motor went/*came dead.
- b. The motor came/*go alive.

さらに、Clark (1974:321) があげている次の (3a) で、went pale が許されるのは、通常、人の顔色が「青白い」状態は正常でない状態であるからであると言えるであろう。また (3b) で came のみが許されている理由は、それが正常な状態へ戻ったことを表現しているからであると説明できる。したがって、次の (3a) と (3b) も、Clark 仮説で処理できることになる。

- (3) a. Matilda went/*came pale.
- b. Her color slowly came/*went back (to normal).

以上の諸例を見る限り、Clark 仮説は正しく come と go の使い分けを説明することに成功している。

では、次の Clark 自身 (1974:324-5) があげている各例文についてはどうであろうか。

- (4) a. All their fears came/*went true.
- b. Ghislaine came/*went up with the worst idea/ solution / answer.
- c. Lesley came/*went in last in the short story competition.

(4a) は、「彼らの恐れていたことが全て現実化した」ことを意味する。また (4b) は、「Ghislaine が最悪の考え・解決・答えを出した」ことを意味し、さらに (4c) は、「Lesley がショートストーリーコンテストで最下位になった」ことを意味する。これらの文は、意味的に「好ましい状態」あるいは「望ましい状態」を表していないことは明白である。すると、上の (4a)、(4b) 及び (4c) に関しては、どのように考えればよいのであろうか。² ここで言えることは、平常の状態 (normal state) を「好ましい状態」や「望ましい状態」としてのみ解釈すべきではないということになる。むしろ normal state を単に、「一般的に想定可能な状態」「通例予測可能な状態」と解釈すれば、時として、normal state が「現実世界における好ましくない状態」を表すことがあっても不思議ではないことになる。すると、ある状態を「好ましい」あるいは「好ましくない」とするのは、語用論的なレベルでの判断であり、normal state は「良い状態」というよりもむしろ上で述べたように、「一般的に想定可能な状態」あるいは「通例予測可能な状態」を表していると捉える必要があるように思われる。この点に関しては、以下でさらに考察を行うことにする。

安藤 (1986:238) は、Hornby (1975:109) から、次の (5a) と (5b) の例を引用し、Clark 仮説の反例になると述べている。

- (5) a. The knot came/*went untied.
- b. The door came/*went unhinged.

安藤 (1986:238) によると、(5a) は、結び目をほどくことに成功した場合にも用いられるし、また (5b) も、良い状態あるいは悪い状態のいずれにでも解釈可能であり、「come+形容詞」は「良い/悪い」の対立に関しては中立的であるという。確かに、例えば、come true に関しても (4a) のような例に並んで All their dreams came true. のような例が存在し、この文は良い意味に解釈される。このように、「come+形容詞」自体は、状態変化を表すだけであり、come に後続する補語の意味次第で、良い状態への変化あるいは悪い状態への変化を表すと解釈されるものと思われる。

以上のように、安藤 (1986) は、Clark の仮説の不十

¹ ただし、go alive という表現そのものが存在しないというわけではない。例えば、次のように、馬に乗っている人の感覚を描写している And then the complete musculature goes alive beneath him, a tremendous flex and release he feels through the saddle. のような実例が COCA で見られる。

² 安井 (1976) では、normal state が「好ましい状態」と同一視されているようである。(4a)~(4c) の各例に加えて、例えば、His second attack of asthma came on yesterday. (Clark 1974:325) のような例も、安井 (1976:86) によると、Clark 仮説の反例になるという。

分さを唱えているが、その一方で大江 (1982) のようにその仮説を肯定する向きもある。大江 (1982:200) は、(5a) に関しては、ひも (なわ) は、本来はまっすぐな状態にあるものであるが、結び目をつけるという行為は人為的な不自然な状態であり、その状態が本来の自然な状態に戻ったことを表していると述べている。また (5b) に関しても、ドアは人為的にかすがいによって固定するものであり、それがゆるみはずれば本来何もない姿になる。つまり、本来の自然な状態に戻ったことが表現されるとしている。しかしながら、上野 (1995:190) は、come untied, come unhinged あるいは come loose のような表現が、本来の自然な状態へ戻ることを表す形式であるというのであれば、The door came open. のような文を説明することが困難となると述べている。上野 (1995:190) が指摘するように、ドアの本来の自然な状態とは、それが閉じられている状態であると考えられる。なぜなら、ドアの本来の機能はあるスペースを外界と遮断することにあるからである。したがって、ドアの本来の自然な状態とはそれが「閉じられている」状態であり、「開いている」状態ではないことになる。すると、大江の考え方を適用すれば、The door came open. という表現ではなく、The door went open. としなければならぬという理屈が成り立つことになろう。³ さらに、Hornby (1985:190) には、My shoelaces have come undone. の例が見られるが、上の大江 (1980) の考え方を適用すると、「靴ひも」の本来の自然な状態はまっすぐであり、それを結ぶという行為は人為的な行為であり、この文はその自然な状態に戻ったことを表しているという説明になろう。しかし、上野 (1995:190) が指摘しているように、靴ひもの本来の機能はぴたりと靴と足を合うようにすることであり、むしろ結ばれている状態こそが本来の状態と言えなくもないように思われる。そうすると、この場合、come ではなく go が使われてもよさそうであるが、*My shoelaces have gone undone. とすることはできない。したがって、「come+un-Ven」型が、本来の状態に戻ることを表すとする見方に疑問が

生じることになる。以上のことを考えると、上の大江 (1982) の説明はあまり説得力があるようには思われない。⁴

次に、上野 (1995) の説明を見ることにしよう。上野 (1995:190) は、come と go の使い分けに関しては、「現実世界での常識」と「言語世界の事実」とを混同せず同じレベルに乗せないで、両者をすっぱりと切り離して、言語事実は言語の世界で考えなければならないと述べている。上野 (1995:191) は、「come+un-Ven」における come は「分離」を表すと主張し、例えば、The door came unhinged. は、The door came off its hinges. と意味的に等価であり、後者の文では off という「分離」を表す前置詞が形の上でははっきりと明示されている点が両者の違いであるとしている。上野 (1995:195) は、come 自体が「分離」という概念と切り離せないと主張しており、次のような例をあげている。

- (6) a. The stitches came/*went unpicked.
- b. The seam came/*went unripped.
- c. The picture came/*went unveiled.

上の例文ではすべて come のみが許容されている。(6a) (6b) は、「縫い目がほころびた」ことを、(6c) は、「絵の覆いが取り除かれた」ことをそれぞれ意味する。したがって、確かに、上の例はすべて「分離」を表していることになる。しかし、次の (7a) (7b) から「分離」の概念は、come だけでなく go でも表されることが分かる (上野 1995:195)。

- (7) a. Take two tablets of this medicine after each meal until the pain goes/*comes away.
- b. All my strength is gone/*come.

上野 (1995:195-6) は、(7a) と (7b) に関して、次のように説明している。(7a)、(7b) では、「痛み」「力」が身体から「分離」することが述べられているが、一旦、それらが身体から分離すると、それらは「消失」してしまうことになる。このように、go が用いられる場合、「全体」と「部分」が「分離」した後で「部分」が「消失」

³ 上野 (1995:190) は、The door went open. を非文としているが、実際、When they stopped I could hear the big metal lock unlocking and the door went open. のような文が、The iWeb Corpus で見られる。また、Doors went open, a few men and a lot of women scuffled closer and formed a semicircle. のような文も COCA で見つかる。恐らく、観察者の視点 (perspective) が、come あるいは go の選択に関係しているものと考えられる。

⁴ ただし、go undone という表現が存在しないのではないことに注意。例えば、COCA を検索すると、The buttons this time went undone. のような例が存在することが確認できる。

することが表されるが、その一方 *come* が用いられる場合は、「全体」と「部分」が「分離」した後であってもそれぞれが独立して「存在」し続ける (上野 1995:195)。確かに、この両者の違いについて注目すべきであろう。*come* は、「分離」の結果、「全体」と分離した「部分」はそれぞれ独立した存在として存続する。例えば、上であげた (6a) の *the stitches* と (6b) の *the seam* は、「部分」を表していることは明らかであり、それらが「全体」から分離したことが表現されているが、「部分」と「全体」は依然としてそれぞれが独立して存続している。また、(6c) の *the picture* は「全体」であり、それに付随する「部分」と分離したことが表されているが、(6a) と (6b) 同様、「全体」と「部分」は独立して存続していると説明できる。

以上のように、*come* が用いられている例では、「全体」と「部分」の「分離」が表現され、それぞれは「分離」した後も存続するが、それに対して、*go* が用いられている例では、「全体」から「部分」が「分離」することが表され、その後「部分」は消失あるいは消滅する。この点が *come* と *go* との違いということになる。しかし、注意すべきは、*come* や *go* そのものに「分離」という概念が張り付いているとは考えにくいということである。それぞれの動詞そのものは、単に何かがどこかに「入る (*come*)」また、何かがどこから「出る (*go*)」の意味を表すだけであり、それぞれの動詞が結びつく語次第で「分離」の意味が出てくるに過ぎない。上野 (1995) は、「分離」という概念をキーワードとして、*come* と *go* の使い分けに迫っているが、彼はあくまでも意味論的なアプローチをとっていることに注意すべきである。例えば、上野 (1995:200) は、(4a) の *All their fears came true.*、(4b) の *Ghislaine came up with the worst idea/solution/ answer.*、また (4c) の *Lesley came in last in the short story competition.* の各例に関して、言語の世界では「存在するようになる」ことが「好ましい状態になる」ことであり、「存在しなくなる」ことが「好ましくない状態になる」ことだと結論づけざるをえないという。しかし、これらの例に関しては、「分離」という概念を用いた説明とは別の説明が必要である。これらの例に関しては、「恐れていること」が現実化したり、「最悪の考えが浮かんだり」、あるいは「コンテストで最下位になる」というようなことは、一般的に生起することが想定可能な事態である。したがって、第2節で、すでに述べたように、「*come+complement*」という形式は、良いとか悪いというような話し手の評価ではなく、むしろ、話し手にとって、ある事態が、想定内のあるいは予測可能な

事態へ移行することを単に述べるのに用いられるとしてよいように思われる。

3. *come* が悪い状態への変化、*go* が良い状態への変化を表す場合

Radden (1996:432) も、*come* が常に良い意味で用いられるわけではないと述べ、*come to harm* (害を被る、ひどい目にあう)、*come into conflict* (衝突する)、*come loose* ([ひもなどが] ゆるくなる、ほどける)、*come apart* (ほつれる) などの意味的に悪い内容を表すフレーズをその例としてあげている。さらに、Radden (1996:433) は、次のような例もあげている。

- (8) a. *His work has come under attack by sociologists.*
- b. *The two countries came to blows.*
- c. *He came down with a cold.*

(8a) の *come under attack* は、「攻撃を受ける」を、(8b) の *come to blows* は、「殴り合いになる」「けんかを始める」を、また (8c) の *come down with a cold* は、「風邪で寝込む」をそれぞれ意味する。すると、これらの例文は、現実世界の常識から判断すると、それぞれ悪い状態に至ったことを表していると言える。ここでも言えることは、*come* が語用論的レベルで、良い意味の状態変化を表すだけではなく、時として悪い状態変化を表すこともあるということである。繰り返しになるが、*come* 自体は、単に「到達」を表すだけであり、*come* そのものにプラスあるいはマイナスの意味が認められるわけではないということになる。

では、*go* の場合については、どうであろうか。次の (9a) と (9b) の「*go+形容詞*」を含む例を見ることにしよう。安藤 (1986:239) は、*go* の意義素を「手の施しようのない悪い状態になる」としているが、実際は、現実世界の常識に基づく判断による「悪い状態」への変化を表す例が数的に多いというだけであるように思われる。なぜなら、次の例に見られるように、「*go+形容詞*」を用いて、異常な状態から正常なあるいは良い状態への移行を表現することもできるからである (Radden 1996:431)。

- (9) a. *The hostages went free.*
- b. *John promised to go straight.*

(9a) と (9b) は、まさに悪い状態から良い状態への移行

を述べている文であると解釈できる。(9a) は、「人質が解放された」ことを意味し、また (9b) は、「ジョンは更生することを約束した」ことをそれぞれ意味するので、go free と go straight は、良い状態への変化を表していると言うことができよう。

また、Radden (1996:449) には、次の (10a)、(10b) のような例も見られる。これらの文の「go+形容詞」が表す意味も、良い状態あるいは中立的な状態への変化を表していると解釈される。

- (10) a. He was a former gang member who had gone soft.
b. Some day the guns will go silent.

(10a) の go soft と (10b) の go silent については、前者が「柔らかくなる」「(人が) 体力が弱くなる」、「態度が甘くなる」を、後者が「音をたてなくなる」、「黙る」、「静かになる」をそれぞれ意味する。そして、場面や文脈次第で、語用論的に、良い状態への変化、悪い状態への変化、もしくは、良くも悪くもない中立的な状態への変化として、それぞれの表現を解釈することができると考えられる。

さらに、次のような例も存在する。

- (11) a. Their albums go platinum almost instantly. (COCA)
b. Da Brat became the first female rapper to go platinum. (COCA)
c. My grandmother is 90 and still going strong. (OALD)

(11a) と (11b) に見られる go platinum は、「プラチナディスクとなる売り上げを達成する」ことを意味する。すなわち、現実世界における常識から判断すると、これは「良い状態への変化」を表している。また、(11c) の going strong は、「達者である」というプラスの意味を表す。このように、「go+complement」自体は、単に状態変化を表すだけであり、go にプラスの意味が内在している補語が後続すると、当然それは良い状態への変化を示すが、文脈や場面を考慮した語用論的なレベルでは、悪い状態への変化だけでなく良い状態への変化、あるいは、そのいずれでもない中立的な状態への変化も表すと解釈されることができよう。

以上のことから、come が用いられると常に「良い状態」への変化を、また、go が用いられると常に「悪い

状態」あるいは「中立的な状態」への変化を表すと単純に言うことができるわけではないことが確認できる。次の節で、「come+形容詞」と「go+形容詞」についてさらに詳しく見ていくことにしよう。

4. 「come+形容詞」と「go+形容詞」

4.1 come+形容詞

次の (12) で「come+形容詞」の例を見ることにしよう。

- (12) a. The captain's voice came thick.
(Curme 1931:378)
b. The handle bar came loose, and the label has come unstuck.
(Close 1975:186)
c. Once the music started, the whole stage came alive. (COCA)
d. Everything will come right in the end.
(Hornby 1975:109)
e. I think Jenny will come good in the end.
(Lee 2001:50)

(12a) は、「船長の声がしわがれた (かすれた)」こと、(12b) は、「ハンドルがはずれ、そして札がはがれてしまった」こと、(12c) は、「ステージ全体が活気づいた」こと、(12d) は、「最終的には万事がうまくいくであろう」こと、そして (12e) は、「ジェニーは最後にはもち直すであろう」ことをそれぞれ言い表している。⁵ Hornby (1975:109) は、un-を接頭辞に持つ単語と come が結びつく、望ましくない (undesirable) あるいは、不満足な (unsatisfactory) 状態への変化を表すと説明している。確かに、Hornby が説明する通り (12b) は望ましくない状態を表していると解釈できる。また (12a) に関しても、望ましくない状態への変化が述べられていると解釈できるであろう。それに対して (12c)、(12d)、(12e) は、望ましい状態への変化が表現されていると言える。しかし、すでに前節で見たように、ある状態を「良い」あるいは「悪い」と言う場合、それは「現実世界」における語用論的な判断に基づくものであった。ここでも、「come+形容詞」は、単に「状態変化」を表しているだけであ

⁵ (12a) では come が使われているが、COCA では、Ruth's voice went thick. や The male's voice went thick and rough, as though he was fighting a losing battle with the beast within. のように、go thick の例も見られる。

り、「良い」あるいは「悪い」といった価値判断がこの形式そのものに張りついているとするのは見当違いであることが確認できる。

次の節で、さらに「go+形容詞」に関して検討することにする。

4.2 「go+形容詞」

次の Hornby (1975:110) があげている各例を見ることにしよう。

- (13) a. She went pale at the news.
- b. The milk went sour.
- c. The telephone has gone dead.
- d. The engine went dead.
- e. His hair has gone white.
- f. He's going bald.
- g. He went mad/insane.
- h. Her cheeks went very pretty pink.

確かに、語用論的解釈レベルでは、(13a) から (13g) までの例は、悪い状態変化を表していると思われる。しかし (13h) は、悪い意味合いの解釈だけが成立するとは言えない例であるように思われる。例えば、恥ずかしさで頬がピンク色に染まったのか、あるいは喜びでそうだったのかの判断は文脈や場面次第であり、良い意味にも悪い意味にも解釈が可能であると考えられる。確かに、(13) の諸例に見られるように、「go+形容詞」は、現実世界における常識的な判断からは「好ましくない状態への変化」を表すことが多いが、だからと言って、常に悪い状態への変化を表すわけではないことは、すでに前節の (9)、(10) 及び (11) の各例でも確認した通りである。

さらに、次の Radden (1996:440) があげている例を見ることにしよう。

- (14) a. The telephone company is going private.
- b. Dianna has gone public with some intimate royal problems.

これらの例に見られる go private (公開株を買い戻して再び会社の所有権を獲得する)、また go public (公開する) のような表現も、語用論的判断に基づいて、良い意味、悪い意味あるいは中立的な意味のいずれにでも解釈可能であろう。

上述したように、「come+形容詞」と同様、「go+形容詞」自体も、単に「状態変化」を述べているだけであり、

ある状態から別の状態への変化が良いかあるいは悪いとかいった判断は語用論的なものである。

これまで見てきたように、「come+complement」も「go+complement」も、それぞれが、単に「状態変化」を表すだけであり、それらに後続する補語が本来的に持つ意味から判断される解釈（意味論的判断）と、現実の世界に関する知識・常識に基づく解釈（語用論的判断）のいずれかに基づいてそれぞれの形式に対して解釈が施されるということになる。6

4.3 状態の継続を表す「go+un-V-en」

状態変化を表す「go+形容詞」に並んで、状態の継続の意味を表す「go+un-V-en」の形式が存在する。これは、go のあとに un- の接頭辞を伴う動詞の過去分詞が続く形式である。この節では、このタイプに関して少し観察しておくことにする。Bourdin (2003:110) によると、「go+un-V-en」は、counterexpectation (期待 (予想) に反すること) あるいは counternormativity (通常ではないこと) を表すという。つまり、「go+un-V-en」型は、予想に反する事柄や通常では考えられない状態の継続に言及するのに用いられるということである。言い換えると、常識的に考えると当然なされなければならないと予想される事柄がなされないまま放置されている状態が続いていることを表すのがこの型ということになる。Bourdin (2003:110) があげている次の例を見ることにしよう。

- (15) a. Crime is equated with punishment, but most offences are unpunished.
- b. The fact that it's so systematic, going effectively unpunished and often performed by people known to the victims makes it more horrific.

(15a) では、通常の受動形である be+unpunished が用いられており、その一方で、(15b) では、go+unpunished が用いられている。Bourdin (2003:110) によると、(15a) の話し手は、most offences are unpunished という状況を客観的に一つの事実として述べているが、他方 (15b) の話し手は、go unpunished

6 「go+名詞」型ではあるが、Quirk and Greenbaum (1973:353) は、He has gone Democrat/socialist. を例にあげ、このような文には「人を蔑む」意味を伴うとしているが、これも語用論的な意味である。

の形式を用いることによって、状況に感情的に関わっていることを示しているという。つまり、「go+un-V-en」型は、不快なあるいは人をいらさらせるような状況を述べる場合に用いられるということになる。ただし、「不快」「憤慨」などの感情を表すとするのは、まさに「go+un-V-en」型に付随する語用論的な意味であるということに注意すべきであろう。また、この型が常に「不快」や「憤慨」などの言外の意味を表すとは限らない。例えば、次の諸例を見ることにしよう。

- (16) a. She was too attractive to *go unnoticed*.
(N. Sparks, *Safe Haven*)
b. When phone calls *went unanswered*, there were knocks on his door, and when the knocks *went unanswered*, the paramedics burst in.
(M. Albom, *Have a Little Faith*)

(16a) と (16b) は、事態の意外性や異常性といった言語外の含意を伴う状態の継続を描写する文であると考えられるが、これらは、特に「不快」や「憤慨」を表していると解釈される必要はないように思われる。(16a) は、「彼女があまりにも魅力的だったのでそれに気がつかない者はいなかった」という内容であり、(16b) も「電話に誰もでない」状態と「ノックをしても誰も応対しない」状態が持続したことを述べているに過ぎないと考えられる。したがって、語用論的な意味が割り出されるのは、やはり、「go+un-V-en」が用いられている場面・文脈次第であるということになる。

次の Bourdin (2003:111) があげている例文を見ることにしよう。

- (17) a. Our house receives mail addressed to others quite frequently. These things matter: once, a property of ours in England went uninsured for three months; a charge-card account for a large sum incurred interest ...
b. ? Once, a property of ours in England was uninsured for three months.

(17a) では、went uninsured は、問題なく for three months と共起する一方で、(17b) では、was uninsured と for three months は、自然な共起関係を示していない。このことから、ある状況が一定期間「継

続」していることを表現する場合は、「go+un-V-en」型がふさわしいことが確認できる。このように、「go+un-V-en」型は、典型的に、「当然なされなければならない状態に何ら手が施されていない状態が継続している」ことを述べる場合に用いられるとしてよいであろう。⁷

ところで、以上のような例に加えて、「go+形容詞」型にも、次のような状態の継続を表す例が存在する。

- (18) a. The reason 800 million go hungry is not that there isn't enough food in the world, but that they can't afford to buy it.
(COCA)
b. He forgot to mention that for two whole years I went barefoot.
(COCA)

(18a) の go hungry は、「飢えている」「空腹である」状態が継続していることを意味する。また、(18b) では、「裸足でいた状態」がまる2年間続いたことが述べられている。したがって、これらの例における「go+形容詞」は、状態の継続を表している。このように、「go+un-V-en」と「go+形容詞」には、状態の継続を表す用法があることが確認できる。ゆえに、「go+形容詞」は、状態変化を表すことが多いが、時として状態の継続を表すのに用いられることもあることが分かる。

5. come vs. go

この節では、come と go の違いについて見ておくことにする。

5.1 観察者と領域

安藤 (1986:239) は、come と go の意義素に関して、次のように仮定している。

- (19) a. come : <談話の当事者 (i.e. 話し手と聞き手) の縄張り (territory) に入ってくる> (含意: 談話の当事者に心理的・物理的影響を与えるようになる)

⁷ The garbage went uncollected for weeks. あるいは、Many grammatical errors went uncorrected. などの類例が、Radden (1996:449) にも見られる。これらも当然行われなければならない事柄がなされないまま放置されている状態が継続していることを述べている文であると解釈される。

- b. go : <話し手の縄張りから出て行く> (含意: 手の施しようのない、悪い状態になる)

(19a) で述べられているように、come が、談話の当事者の縄張りに入って来ることを意味するという安藤 (1986) の説明は、基本的に正しいと考えられる。しかし、go の意義素に関しては、これまでの観察からその含意として「手の施しようのない悪い状態になる」という説明だけでは不十分であろう。安藤 (1986) は、縄張り (territory) という表現を用いているが、本稿では、「領域 (region)」という用語を使用することにする。また、安藤 (1986) は、「談話の当事者」という用語を用いているが、本稿では、話し手 (あるいは文主語) と聞き手を含めて「観察者 (observer)」という表現を使うことにする。「領域」とは観察者 (話し手 (あるいは文主語) と聞き手) が物理的あるいは心理的に関与している場面や状況を指すものと定義しておく。具体的には、come の使用により、何がしかの entity が観察者の領域内に入って来て、観察者は、それを視覚で捉えることができたり (visible)、それに接近可能であったり (accessible)、それを制御することができ (controllable) たり、あるいは働きかける (work on) ことができる可能性があることが述べられることになる。それに対して、go の使用により、何がしかの entity が観察者の領域内から出て行き、come の場合とは反対に、観察者は、その entity を視覚で捉えられない (invisible)、接近することができない (inaccessible)、あるいは、制御不可能 (incontrollable) な存在として認識していることを表す。したがって、come は、基本的に何がしかの entity の「出現」、「存在」を表し、その一方、go は、基本的に何がしかの entity の「消滅」、「非存在」を表すということになる。そして、意味論的には、come は、何がしかの entity が単に観察者の領域に入ること (arrival) を、一方 go は、何がしかの entity が単に観察者の領域から出て行くこと (departure) を述べるのに用いられるに過ぎず、ある状態が良いとか悪いとかの解釈は、語用論的に決定される。もちろん、come と go に後続する complement そのものが持つ意味が、プラス評価を表す場合、好ましいとされる状態変化が生じる解釈がなされ、complement がマイナス評価を持つ場合、好ましくないとされる状態変化が生じる解釈がなされるし、complement の意味が中立的であれば、良くも悪くもない中立的な状態変化が生じる解釈がなされるわけであるが、これはいけば意味論的な解釈ということになる。すでに第 2 節でも触れたよ

うに、結局、Clark が述べている normal state (通常の状態) とは、「通例、現実世界で起こる可能性が高い状態」、「一般的に生起可能と想定することが可能な状態」と解釈すべきであろう。したがって、come が用いられている場合、それが常に好ましい状態を表すわけではないことになることはすでに第 3 節で見た通りである。また、go も、それが常に悪い状態や中立的な状態だけではなく、望ましい状態への変化を表すのに用いられることもすでに第 3 節で見た通りである。

結局のところ、「come + complement」と「go + complement」のいずれに対しても、complement そのものに内在する意味から割り出される意味論的解釈がなされる場合と、それらの形式が、場面や文脈、あるいは一般常識的な知識に基づいて語用論的解釈がなされる場合の二つの場合があるということになるであろう。

5.2. 主観性 vs. 客観性、直接的関与 vs. 間接的関与

come が用いられている場合、何がしかの entity が、観察者の領域内に存在することになる。すると、観察者は、その entity に物理的あるいは心理的に関与していることになる。そして、その場合、観察者は、その entity を主観的に見ていることを含意する。一方、go が用いられている場合、観察者は、何がしかの entity を自分の領域外に存在するものと捉えていることになり、それゆえに、観察者は、それを自分とは直接的には関係のないものと見ることになる。したがって、このような場合、観察者は、その entity を客観的に見ていることを含意する。Clark (1974:327) があげている次のペアの例を見ることにしよう。

- (20) a. The tomatoes are coming along nicely this year.
b. The tomatoes are going along nicely this year.

Clark (1974:327) によると、(20a) は、トマトの栽培者自身が述べている文、あるいは、トマトの栽培に好意的な人物が、誰かがトマト栽培をしていることを好意的に見て述べているような文であるという。つまり (20a) では、この文の発話者が、主語名詞句である the tomatoes に直接的に関与していることが暗示されている。それに対して (20b) は、栽培者自身が述べることはありそうにないという。つまり、この文は、トマト栽培に関わっていない中立的な第三者による発言としてふさわしいという。したがって、(20b) の発話者は、主語名

詞句 the tomatoes に直接的に関与しておらず、関与の仕方は間接的である。同様のことは、次の (21a) と (21b) 及び (22a) と (22b) のペアの例文に関しても言えるという (Clark 1974:327)。

- (21) a. Alan came down with hysterics.
b. Alan went down with hysterics.
(22) a. The plane came down near the lake.
b. The plane went down near the lake.

(21a) と (21b) の違いは、Alan がヒステリーの発作を起こして倒れた状況を共通に描写しながらも、(21a) は、この文の発話者が Alan に直接的に関与していることを含意し、その一方、(21b) では、この文の発話者は、Alan とは直接的に関与しておらず、Alan が倒れたことを客観視していることを含意していると言えるであろう。また、(22a) と (22b) の違いについてであるが、Clark (1974:328) は、(22a) は、飛行機が落ちたが、その結果が比較的幸運であったことを暗示するが、(22b) は、結果が間違いなく「墜落」であったことを暗示すると説明している。そして、その証拠として、Clark (1974:328) は、safely のような副詞を come が用いられている (22a) に挿入しても自然であるが、同じ副詞を go が用いられている (22b) に挿入すると、非文になるとしている。次のペアの文がその例である。

- (23) a. The plane came down safely near the lake.
b. *The plane went down safely near the lake.

(22)、(23) の各例に関しては、Clark (1974) の主張通り、come が用いられている (22a)、(23a) が、speaker-approved state あるいは public-approved state を表すことは確かである。また、それに対して go が用いられている (22b)、(23b) に関しても、Clark (1974) が述べる通り、negative な意味が含意されているということが確認できる。では、なぜ come が使われると話し手や一般の人にとって是認される状態を表すことが多いのであろうか。この疑問に対する一つの答えとして次のようなことが言えるように思われる。人間は基本的に ego-centric な物の見方をするのが通常であると考えられる。つまり、人間は、通例、自分を中心にして世界を見る視点を持っている。したがって、現在、自分が存在する場所を世界の中心と捉え、その場所を基準点として身の回りの状況

を観察するということになる。そして、観察者は、現在自分が存在する場所を「正常」な場所と見なし、自分にとって不可視な場所あるいは手の届かない場所は自分の影響力が及ばない場所であるがゆえに、そのような場所は自分にとって「正常ではない」場所として認識する。したがって、通例は、観察者は、自分が存在する場所を自分の「領域」として捉え、その状態を「平常な状態 (normal state)」として、また、自分の領域にはない状態を「通常ではない状態 (non-normal)」として見る。これが、無標の場合であると考えられよう。このような領域に関する観察者の認識の違いが come と go の用いられ方の違いに反映されているものと思われる。すでにこれまで見てきたように、確かに、come が用いられている文が表す内容がプラス評価される場合が多いのは事実である。また、go が用いられている文が表す内容が、悪い状態への変化を描写することが少なくないのも事実である。しかし、これは数の問題であることはすでに見た通りである。実際には、come は、単に「何がしかの entity が観察者の領域内に入ってくる」ことを述べるに留まり、また、go も単に「何がしかの entity が観察者の領域から出て行く」ことを述べるだけである。したがって、ある entity が観察者の領域内に入ってくる場合も、またそこから出て行く場合も、状況が良くなることを表すこともあれば悪くなることを表すこともあることになる。

5.3 come と go が表す意味

come は、到達 (arrival) を表すので、アスペクト的には、終動相あるいは終始相 (terminative) を表し、ある entity が観察者の領域内に出現することによって、結果それは観察者の領域に「存在」することになる。一方 go は、出発・離脱 (departure) を表すので、アスペクト的には、新しい状態の開始、つまり、起動相的 (inchoative) な状態を表す。基本的に go を用いることで、ある entity がどこかに向かって進んでいくことが表される。物理的な観点からは、ある entity が一旦動き始めたら、そのまま一定方向に進んでいくイメージ (状態持続を表す go+形容詞と go+un-V-en) を持つことができる。また、ある entity が一定方向に進んでいても、何らかの外的な力が加わって、方向がずれる、つまり、別の方向へ逸脱する事態をイメージあるいは想像することは容易であろう。このイメージにより、逸脱 (diversion) という概念が「go+形容詞」のパターンとして具現化されることもあるわけである (例えば、go bad, go mad, go awry, go wild など)。いずれにせよ、go

は、ある entity がそのまま一定の方向に進むこと（状態持続）、また、時として、何かのはずみで（外的な力が加わった結果）コースを変更して進んで行くこと（別の状態への逸脱）などを表すものとして認識されるのである。go にマイナスの意味が含意されることが多いのは、直示的中心（the deictic center）としての話し手の領域からの「分離」「逸脱」が述べられるからに他ならない。また、go が用いられることで、何がしかの entity なり状態が、話し手の領域外のところに出て行くというイメージが描写され、それが「手の施しようのない状態への変化」、つまり、観察者にとって望ましくない状態への変化として認識されることになる。また、go は、何がしかの状態や事態が「進行」していく様子を表すのに用いられるがゆえに、それが観察者から遠のいて行く様子、そして最終的には観察者の視覚外のどこかへ消えて行くイメージにつながっていくものと考えられる。そのような場合、何がしかの entity の「消滅」、「非存在」が表現されることになる。つまり、ある entity が come と共に言及されると、その entity が観察者の領域内に物理的あるいは心理的に入って来て存在するようになることが含意される。それに対して、ある entity が go と共に言及されると、その entity が観察者の領域内から物理的あるいは心理的に出て行き、それが観察者の領域からの消滅することを含意する。

以上の内容をまとめてみると、次のようになるであろう。

- (24) a. ある entity が観察者の領域に物理的あるいは心理的に存在するようになることを表す場合、come が用いられる。
b. ある entity が観察者の領域から物理的あるいは心理的に不在になることを表す場合、go が用いられる。

結局のところ、基本的にこの単純な原理が come と go の使い分けを決定しているのではないかと考えられる。

6. おわりに

本稿で、「come+complement」と「go+complement」に関して考察を試みた。当然のことながら、結局、両者の違いは、come と go の違いを明確にすることに繋がり、最終的には come と go の違いに言及するに至った。

最後に、本稿で観察したことをまとめておくことにする。

1) 「come+complement」も「go+complement」のいずれも、ある状態から別の状態への変化を表す。前者の「come+complement」が、「良い状態への変化」を表すことが多い理由は、この形式が観察者にとって正常と捉えられる領域に何がしかの entity が入って来ることを示すからである。ただし、この形式が、良い状態への変化だけではなく、実際は、悪い状態への変化を表すこともあることに注意すべきである。それに対して、「go+complement」が、「悪い状態への変化」あるいは「中立的な状態」を表すことが多いのは、この形式が観察者の領域から、何がしかの entity なり状態が出て行くことを示すからである。話し手の領域は、話し手にとって正常な状態であると捉えられているがゆえに、この形式が、通例の状態からの「逸脱」を表すことが多いが、ある状態が良い方向へ逸脱することを表す場合もあるので、go に後続する補語の意味を考慮しなければならない。その結果、場合によっては、「良い状態への変化」あるいは「中立的な状態への変化」のいずれかに解釈される場合も出て来ることになる。

2) 「go+形容詞」と「go+un-V-en」が、ある状態の継続を表すことがある。いずれの形式も、通常ではない状態が継続することを表すのに用いられる。後者は、当然なされていなければならない状態が継続していることを表すのに用いられる。「go+形容詞」と「go+un-V-en」のいずれの形態に関しても、それらが「良い状態」であるかあるいは「悪い状態」であるかの判断は、語用論的レベルでなされる。

3) come あるいは go に続く補語に良い、あるいは望まれるような意味が内在していれば、良い意味への変化を表す読みがなされる。それに対して、come あるいは go に後続する補語に、悪いあるいは望まれない意味が内在している場合、悪い状態への変化を表す読みがなされる。これは、補語の意味次第の解釈であるので、意味論的解釈ということになる。しかし、come あるいは go に後続する補語の意味が中立的である場合は、それが表す意味は、文脈や場面あるいは一般的な常識からそれが、良いか悪いかわ、あるいは中立的であるかの解釈がなされる。これは、語用論的解釈ということになる。

4) 何がしかの entity が観察者の領域内に入ってくることは、come で表されるが、その場合、その entity は、観察者にとって、visible、accessible、あるいは controllable であることが暗示される。一方、何がしかの entity が観察者の領域から出て行くことは go で表されるが、その場合、その entity は、観察者にとって invisible、inaccessible、あるいは incontrollable なも

のとなることを暗示する。

5) 観察者がある *entity* を主観的に捉え、それに直接的に関与している場合は、*come* が用いられる。一方、観察者がある *entity* を客観的に捉え、それに間接的にしか関与していない場合は、*go* が用いられる。

店。

The Corpus of Contemporary American English.
The iWeb Corpus.

(平成30年9月28日受付)

参考文献

- 安藤貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理』 東京：大修館書店.
- Binnick, R.I. 1971. “Bring and Come”, *Linguistic Inquiry* 2, 260-265.
- Bourdin, P. 2003. “On Two Distinct Uses of Go As a Conjoined Marker of Evaluative Modality.” in Facchinetti, R, M. Krug, and F. Palmer eds., *Modality in Contemporary English*, 103-127. Berlin / New: Mouton de Gruyter.
- Clark, E.V. 1974. “Normal States and Evaluative Viewpoints”, *Language* 50, 316-332.
- Close, R. C. 1975. *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.
- Curme, G.O. 1963. *Syntax*, Tokyo: Maruzen Company Ltd.
- 出原健一. 2006. 「Go の意味論—認知論的視点から」『認知言語学論考』 No 6, 125-155. 東京：ひつじ書房.
- Hornby, A. S. 1975. *Guide to Patterns and Usage in English* (2nd ed.). Oxford: Oxford University Press.
- Lee, D. 2001. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- 大江三郎. 1982. 『講座・学校文法の基礎 第四巻 動詞(I)』 東京：研究社.
- Quirk, R. and Greenbaum, S. 1973. *A University Grammar of English*. London: Longman.
- Radden, G. 1996. “Motion Metaphorized: The Case of Coming and Going.” in E. H. Casad ed., *Cognitive Linguistics in the Redwoods: The Expansion of a New Paradigm in Linguistics*, 423-458. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 上野義和. 1995. 『英語の仕組み』 東京：英潮社.
- 安井 稔 (編). 1976. 『海外英語学論叢』 東京：英潮社.

辞書・コーパス

- Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English. (8th ed.) 2010. Oxford University Press. (OALD8)
- 『ジーニアス英和大辞典』 初版. 2001. 東京：大修館書